

千葉市感染症発生動向調査情報

2012年 第26週 (6/25-7/1) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数		26週	25週	24週	23週
小児科		18	18	18	18
眼科		4	4	4	3
インフルエンザ*		26	25	23	27
基幹定点		1	1	1	1

上段:患者数
下段:定点当たりの患者数

「定点当たりの患者数」とは
報告患者数/報告定点数。

定点	感染症名	千葉市					千葉県
		注意報	6/25-7/1	6/18-6/24	6/11-6/17	6/4-6/10	6/18-6/24
			26週	25週	24週	23週	25週
小児科	RSウイルス感染症		0	1	2	1	2
	咽頭結膜熱		5	5	3	5	58
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		55	62	73	59	341
	感染性胃腸炎		129	164	140	129	1,063
	水痘		12	33	10	18	157
	手足口病		5	3	0	2	36
	伝染性紅斑		1	3	1	0	30
	突発性発しん		17	16	8	13	83
	百日咳		1	0	0	0	5
	ヘルパンギーナ	○	24	23	11	10	149
	流行性耳下腺炎	○	11	8	2	7	69
インフル	インフルエンザ*(高病原性鳥インフルエンザ*を除く)		0	0	0	1	3
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	1
	流行性角結膜炎		1	1	1	1	24
基幹定点	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		1	0	0	0	0
	無菌性髄膜炎		0	0	0	0	1
	マイコプラズマ肺炎	○	3	0	4	5	8
	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	1	1	2	1

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患(6件)

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	50歳代	病原体等の検出等	結核	女性	30歳代	QFT
結核	女性	20歳代	QFT	結核	女性	60歳代	QFT等
結核	女性	20歳代	QFT	結核	女性	100歳代	病原体の検出

・結核6件(167)の報告があった。

()内は2012年累積件数 ※ 累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第26週のコメント

<ヘルパンギーナ> 前週より増加し1.33となった。過去10年間の同時期と比べると少なめ。
 <流行性耳下腺炎> 前週より増加し0.61となった。過去10年間の同時期と比べると少なめ。
 <マイコプラズマ肺炎> 前週より増加し3.0となった。過去10年間の同時期と比べると最多。

トピック

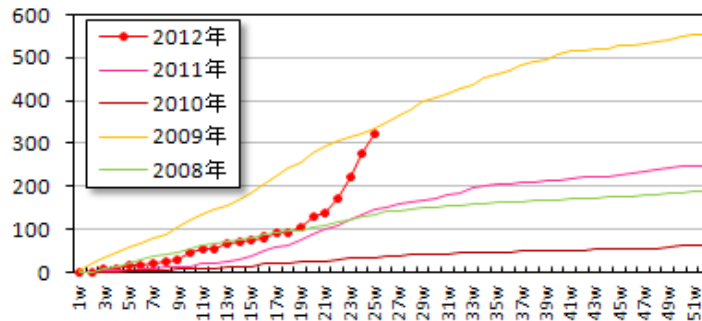
<風しん>

2012年の全国レベルの累積数は、第22週から急増し、第25週現在は2009年に次いで多くなりました。都道府県別では、兵庫県、大阪府、東京都の順に多くなっています。千葉県は、関東地方では東京都、神奈川県に次いで埼玉県と並んでいます。千葉市では第26週現在までのところ1件の届出となっていますが、第25週は東京都が全国最多となっていることから今後流行する可能性も考えられますので、感染防止に注意してください。

風疹は、発熱、発疹、リンパ節腫脹を特徴とするウイルス性発疹症で、基本的には予後良好な疾患ですが、まれに見られる先天性風疹症候群予防のため、妊娠可能年齢およびそれ以前の女性に対するワクチン対策が重要な疾患です。

14～21日(平均16～18日)の潜伏期間の後、発熱、発疹、リンパ節腫脹(ことに耳介後部、後頭部、頸部)が出現しますが、発熱は風疹患者の約半数にみられる程度です。最大の問題は、妊娠前半期の妊婦の初感染により、風疹ウイルス感染が胎児におよび、先天異常を含む様々な症状を呈する先天性風疹症候群(congenital rubella syndrome: CRS)が高率に出現することにあります。妊娠中の感染時期によって重症度、症状の発現時期は様々で、先天異常として発生するものとしては、先天性心疾患、難聴、白内障、網膜症などが挙げられます。特異的治療法はなく、発熱、関節炎などに対しては解熱鎮痛剤を用います。弱毒生ワクチンが実用化され、広く使われています。

風しん:年別発生報告累積数の比較(全国)



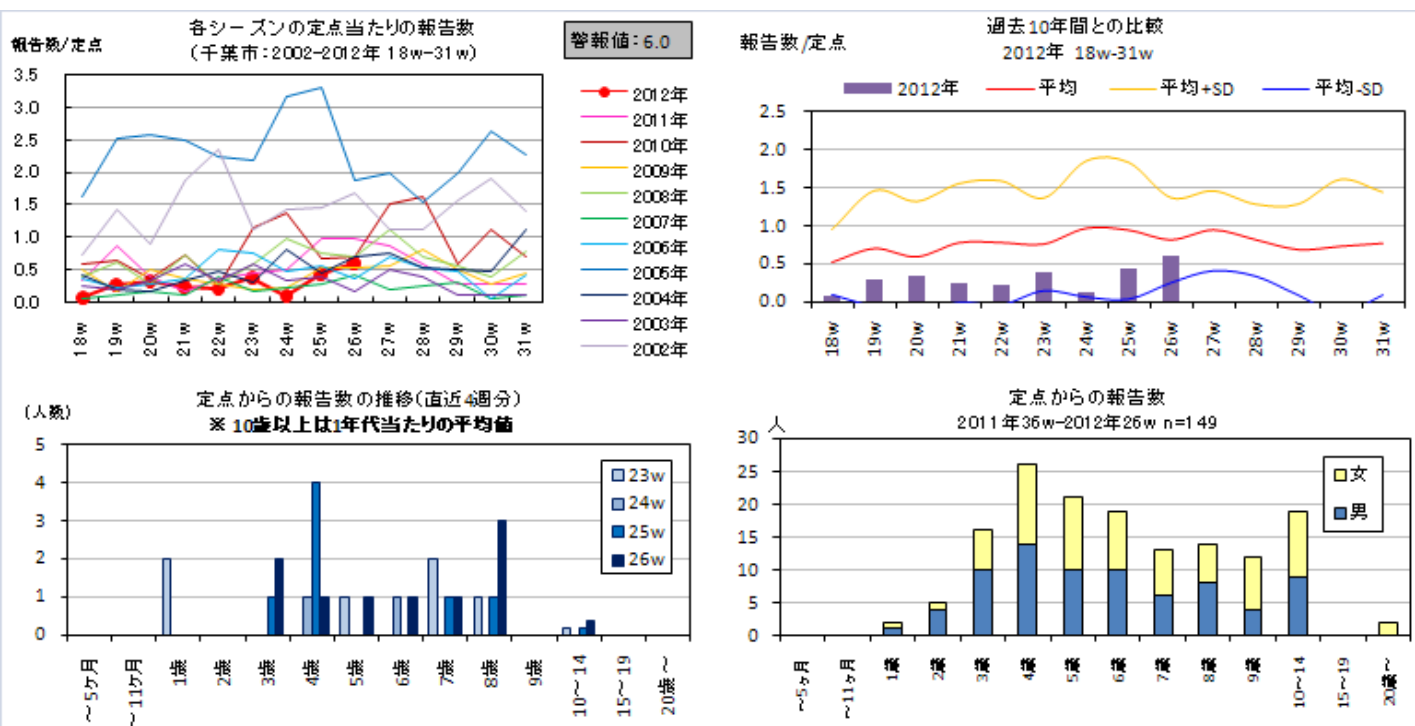
<流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)>

2012年の全国レベルの第25週現在は、過去5年間の同時期と比べて少なくなっています。都道府県別では岩手県、大分県、島根県の順で多く発生しています。千葉県は全国レベルとほぼ同等となっています。千葉市の第26週は、前週から引き続き増加し0.61となりましたが、過去5年間の同時期としてはやや少なめとなっています。

流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)は2～3週間の潜伏期(平均18日前後)を経て発症し、片側あるいは両側の耳の近くが腫れることを特徴とするウイルス感染症です。接触、又は飛沫感染で伝播し、感染力はかなり強いとされています。

唾液腺の腫脹・圧痛、嚥下痛、発熱を主症状として発症し、通常1～2週間で軽快します。感染しても症状が現れない不顕性感染も多く認められます。腫脹のほとんどは耳下腺で認められますが、顎下腺、舌下腺にも認められることがあります。合併症の多くは髄膜炎で、その他に、睾丸炎、卵巣炎などを認める場合があります。また、頻度は少ないですが、難聴や聾炎は重い合併症の一つです。

効果的に予防するにはワクチンが唯一の方法ですが、患者との接触当日に緊急ワクチン接種を行っても、症状の軽快が認められるのみで発症を予防することは困難であると言われています。集団生活に入る前にワクチンで予防しておくことが、最も有効な感染予防法です。



<結核>

2012年の全国レベルの第25週現在の累積数は、過去5年間の同時期と比べて最多となっています。都道府県別では、東京都、神奈川県、千葉県順で発生が多く見られます。千葉市では、第26週現在、届出累積数は167で、過去5年間の同時期と比べてやや多めとなっています。性別では、女性が若干多くなっています。病型別では、無症状病原体保有者の占める割合が増加傾向にあり、2012年第26週現在では肺結核の方が若干多い程度となっています。肺結核は60歳代の男性及び80歳代女性で多く、無症状病原体保有者は男性では20歳代～30歳代、女性では20歳代と40歳代で多くなっています。住所別では市内在住者の占める割合が増加しており、市内では中央区在住者の占める割合が増加しています。職業別では医療関係者の占める割合が増加傾向にありますが、医療機関での結核健康診断(血液検査)の実施率が高まってきていることも要因の一つとして考えられています。結核は、現在においても国内で最大の感染症です。肺結核で一番多い症状は、咳・たん・発熱・倦怠感・体重減少などです。特に、咳が2週間以上も続く場合には、必ず医療機関で診察を受けましょう。

